



部門長就任に当たって

横田 眞一
東京工業大学

今年度、橋本前部門長に変わり部門長を務めさせていただくことになりました。機素潤滑設計部門も、部門発足より10年目を迎え、また、世の中も1月には21世紀を迎えようとしております。世の中全体が大きな変革を求められている昨今、学会も例外ではないようです。

本部門が機械要素を中心とした機械工学の中でも歴史と伝統ある部門であることをふまえた上で、さらに新しい領域を開発していける活気のある部門にするために、部門に関心のある会員各位とともに努力していきたいと思っております。機素潤滑設計部門の名称は、すこし硬く感じられるようです。私はこの部門のキーワードとして、機械の動きを創造する（アクチュエータ、メカニズム）、支える（要素、トライボロジー）、伝達する（要素、メカニズム、センサ）ということで、モーションエンジニアリングが適当ではないかと考えています。

現在、皆様もご存じのように日本機械学会では、部門の活性化について議論がなされ、いくつかの方策が実行に移されようとしています。具体的には、部門の活性化として、部門の活動の自由裁量権の拡大と経済的自立および部門活動の評価、またそれに伴う学会財政問題の解決策が提案されています。諸事情から、現在提案されている方策は、はじめの意図が見えない魂抜きのような状態にあり、会員のためというより学会のための部門の活性化策に堕ちており、最良な改革策とは感じられませんが、いろいろな意味で古い秩序をすてて枠組みを再構築することが必要な時期にきているのでしょうか。10年の節目ということで、機素潤滑設計部門についても見直していくいい機会が来ているのかもしれない。

部門に参加している会員側から見ると、部門とは、第一義として同好の士同士が意見交換を自由にできる機会をつくることであると思います。意見交換の場としては、国内講演会、講習会、国際会議、研究委員会、同好会などがあります。これらを整うすれば部門活動としては十分ではあるが、それを積極的

にできるかどうか運営委員会に懸かっているということです。私としてはこれらの活動を通して部門の活性化ということを考えていきたいと考えています。

またとくに、今年から日本機械学会の全体の講演会が、夏の時期の年次大会一本になりました。部門として講演会を企画しないと、部門活動の低下が懸念される事態になっています。以前から、部門独自の講演会企画は運営委員会の懸案事項であり、他学会、他部門、支部との合同企画も視野に入れて歴代の部門長により検討されてきましたが、本部門は、機械要素、トライボロジー、メカニズム、アクチュエータ、センサと広範な領域をカバーしているため、これまで他学会、他部門、支部と開催時期が重なることが多く実現をみないまま現在に至っております。

今回は、学会主催の全国規模の講演会が減ったことと部門活動評価等にも対応したいとのモチベーションも強くあり、この機会にぜひ部門独自の講演会を開催するきっかけを創りたいと考えています。すでに8月の運営委員会で基本的に部門独自の講演会開催を承認いただき、9月に臨時の委員長会議を招集して、検討いたしました。

方針としては、他の学会講演会等と重ならないようになるべく同じ時期に毎年開ける時期を設定する、また、開催場所は固定せず、技術懇談会、懇親会を泊まりがけでもできるような場所をなるべく優先する、基調講演を盛り込むこととしました。検討の結果、時期は4月上旬にすること、第1回目は東京近辺とし、委員長会議メンバーで実行委員会を構成し、各企画委員会委員長が回り持ちで実行委員会委員長を務めることになりました（p.8参照）。

会員のための部門の活性化を図っていくには、いくつものすべきことがあると思いますが、今期は部門独自の国内講演会を軌道に乗せることに全力を注ぎたいと思いますので、ご支援と積極的な参加のほどをよろしくお願いいたします。